

研究開発実施状況報告書

住所 奈良県奈良市法蓮町 1000 番地
管理機関名 学校法人 奈良育英学園
代表者名 理事長 藤井 宣夫

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発の実施状況を、下記のとおり報告します。

記

1 事業の実施期間

(契約締結日) ~ 令和 2 年 3 月 31 日

2 指定校名・類型

学校名 育英西中学校・高等学校
学校長名 北谷 成人
類型 グローカル型

3 研究開発名

「他者を巻き込む行動」により地域に貢献する「自立女子」の育成

4 研究開発概要

進路目標の異なる 3 コースをもつ本校では、2020 年度大学入試改革に先駆けて、課題解決型の学びを全コースの一部教科で導入した。また探究的な学びを目的とした学校設定科目を一部コースで設置してきた。これらの先行的な取り組みを実施する中で、どのコースにも共通する課題があると認識している。それは課題解決に際し、解決策提案にとどまりがちな点である。将来地域人材として地域課題の解決に資する女性の育成にあたっては、この現状を打開し、「行動する力」とりわけ「他者を巻き込む行動ができる力」を培う必要がある。そこで本校は 3 コースの特性を生かし、下記の研究開発を行う。

① 特設コースⅠ類を対象とした学校設定科目「シナジータイム」、立命館コースを対象とした学校設定科目「Science&Discovery」(S.D.)を体系化する。

② 特設コースⅡ類を対象とした奈良県立大学との共同プロジェクトを軸にして、本校中学校で導入した国際バカロレアにおける、「概念」を中心に学ぶという考え方に依拠した授業開発をする。教科内容ありきではなく、概念ありきの学びを構築し、教科学習の中で思考力・探究力を培う。

③ 地域・世界とのつながりを生かして実現する行動実践による生徒への影響を検証する。

④ 生徒に自らの力のメタ認知を促すための評価法を開発する。

これらの研究開発の素地として、「知識・技能の獲得」「内的動機付け」「実践」という各過程をスパイラル式に経験し、その過程を生徒自身がメタ認知することで、「他者を巻き込む行動ができる力」は得られると仮説を立てる。

5 教育課程の特例の活用の有無 ア 無 イ 有

6 管理機関の取組・支援実績

(1) コンソーシアムについて

① コンソーシアムの構成団体

機関名	機関の代表者名
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	理事長 藤井 宣夫
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	事務局長 竹田 基宏
育英西高等学校(推進校)	校長 北谷 成人
奈良育英高等学校(協力校)	校長 沼田 守弘

奈良育英小学校	校長 東 誠司
育西会 *推進校 PTA 組織	会長 廣瀬 昇
特別非営利活動法人 関西 NGO 協議会	代表 藤野 達也
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	会長 福井 重忠
公立大学法人 奈良県立大学	学長 伊藤 忠通
有限会社 村井食品	社長 村井 猛
学校法人立命館 立命館大学	学長 仲谷 善雄

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 5 月 7 日	コンソーシアムを組織する。
令和元年 5 月 7 日	第 1 回会合：今年度実施計画について説明し、その内容について協議・決定する。
令和元年 5/13、6/20、8/26、9/27、 10/31、11/26、12/21	立命館一貫教育部との定例会合 主に立命館コースの教育内容について協議し、S.D. の改善や連携行事について提言を受ける。
令和元年 11 月 14 日	関西 NGO 協議会 (PHD 協会) とのコラボ授業
令和 2 年 1 月 30 日	第 2 回会合：今年度の報告と来年度の計画について協議し、方針を決定する。

〈第 1 回会合 (5/7 実施) 協議内容〉

- ・出席者 14 名
- ・推進校から本事業における研究開発構想説明
- ・研究開発構想説明を受けて質疑応答
 - ・シナジータイムの探究活動先としてタイを選定したのはなぜか。タイの社会問題と奈良の地域課題との関連性はあるのか。
 - 安全性の確保と、都市としても課題、格差の課題を含んでいるという 2 つの観点からタイを選定した。この活動を通じて、奈良が抱え課題との関連性を生徒自身が見つけてくれることをねらいとしている。
 - ・目標設定シートで、数値になりにくい部分をどうするのか。
 - 今年 1 年かけて、可視化が困難な項目を測るルーブリックを作成する予定である。
 - ・生徒の意識調査は、いつ実施するのか。中学生にも実施するのか。
 - 5 月と 12 月に実施を予定している。中学生にも実施する予定でいる。
- ・推進校の説明を受けての参加者からの意見を受け、今年度の計画を推進していく観点としていくことを確認した。
 - ・商品化した弁当の売り上げの一部を寄付することについて、続けてほしい取り組みである。寄付が大事だとわかっているにもかかわらず実践してもらえない現状がある。推進校の取り組みが、若いうちから寄付の重要性に気づく意味につながるのではないかと期待している。
 - ・「とりみふらっと」の運営は、推進校の事業の参考にならないか。
 - ・グローバルな視点をどう持たせるかが大きな課題である。海外への長期滞在はハードルが高い。旅行会社とのタイアップを図る、修学旅行のプランニングに組み込むなどの工夫を積極的に行ってほしい。また、単発でもいいから、海外学生と触れ合う体験を増やすといい。
 - ・推進校の事業は、「地域で生きる」ことを若いうちから考える意義をもっている。地域創造学部として、グローバルは大学としても目指すところだ。高

大接続を円滑に行う取り組みになればと思い、協力をさせていただきたい。

- ・高校生を対象にした「ワンワールドフェスティバル for Youth」を主催しているが、国際協力への熱心な取り組み姿勢に、高校生も捨てたものではないと感じる。こうした機会もぜひ活用していただきたい。

〈第2回会合（1/30 実施）協議内容〉

- ・出席者 17名
- ・同日に実施された推進校実践発表会を受けて、参加者から意見をいただき、次年度の計画に組み込む観点にすることを決定した。
（参加者からの意見）
 - ・長期休暇期間を活用して、特別養護老人ホームに生徒を派遣するなどの連携の可能性を前向きに検討していただきたい。
→ ボランティア委員会の活動計画に組み込む。
 - ・「SDGs」を題材に探究活動を進めている様子がよくわかった。「SDGs」を推進する国際協力NGOという視点で連携していきたい。
→ 高校1年で実施する「S.D.基礎」「シナジータイム」との連携をはかる。
 - ・（実践発表会を参観して、）問いを立てる段階でしっかり考えさせることが重要だと感じた。問題解決に変に慣れすぎると、掘り下げて論文を書くことが難しくなる。
 - ・女子校という立ち位置から、ジェンダー問題を柱においてもいいのではないか。たとえば、「女性と地域」「女性とグローバル」といったテーマのもとに探究活動をさせるのはどうであろうか。目的意識を明確にして、探究活動を推進していただきたい。
→ 奈良女子大学との共同プログラムのテーマとして考えていく。

(2) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

分類	氏名	所属・職	雇用形態
海外交流アドバイザー	山田 浩美	NIST International School・Instructor	非常勤職員
海外交流アドバイザー	玉井 満代	(株)タマイインベストメントエデュケーションズ・社長	非常勤職員
海外交流アドバイザー	田中 真美子	HOME STAY AUSTRALASAI プロジェクトマネージャー	非常勤職員
海外交流アドバイザー	北田 多喜	翻訳家	非常勤職員

②活動日程・活動内容

- ・海外交流アドバイザー・山田 浩美氏

活動日程	活動内容
平成31年4月17日	育英西高等学校の職員対象ワークショップ講師 「探究活動の定着について」
同氏はタイ在住のため、交流校探しに関する助言をメールで受ける	

- ・海外交流アドバイザー・玉井 満代氏

活動日程	活動内容
海外出張が多いため、インドにおける交流校探しに関する助言をメールで受ける	

・海外交流アドバイザー・田中 真美子氏

活動日程	活動内容
同氏はオーストラリア在住のため、短期留学に関する助言をメールで受ける	

・海外交流アドバイザー・北田 多喜氏

活動日程	活動内容
令和元年 11 月 12 日	来校 グローバル委員会とディニアプトリ女子校との交流及び同校訪問について打ち合わせ
海外出張が多いため、交流校とのやり取りの仲介はメールで受ける	

(3) 地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

グローバル担当事務職員 中濱 公香氏(派遣職員として雇用)週 4 日勤務。

②実施日程・実施内容

地域協働学習実施支援員の活動実績について、具体的に記入すること。

日程	内容
令和元年 9 月 2 日	事務担当の派遣職員として採用 グローバルに関する会計、事務、案内、発送を主に担当

(4) 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

氏名	所属・職
奈良育英高等学校(協力校)	校長 沼田 守弘
奈良育英小学校	校長 東 誠司
特別非営利活動法人 関西 NGO 協議会	理事 田尻 忠邦
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	会長 福井 重忠
奈良県立大学 地域創造学部	准教授 松岡 慧祐
有限会社 村井食品	社長 村井 猛
立命館大学 政策科学部	教授 桜井 政成

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 5 月 7 日 (第 1 回)	第 1 回会合：今年度の実施計画について説明し、今年度の方針について指導助言を受ける。
令和元年 7 月 11 日、9 月 27 日	奈良市社会福祉協議会と生徒との合同ミーティング。主に今後の活動方針や活動内容の妥当性などについて生徒とともに議論した。
令和元年 7 月 25 日、8 月 27 日、10 月 28 日、11 月 25 日	県立大学との共同プログラムにおいて、松岡准教授の特別講義を受け、中間発表会での指導助言を受ける (アドバイザー)
令和元年 5 月 22 日、11 月 2 日、11 月 7 日、令和 2 年 1 月 22 日、2 月 10 日	村井食堂との「お弁当総選挙」における取組 ・今年度の取組と流れについて説明 ・校内発表プレゼンの内容説明等 ・校内発表・商品開発に向けて生徒との打合せ ・商品化の企画会議
令和 2 年 1 月 30 日 (第 2 回)	第 2 回会合：今年度の報告と来年度の計画について説明し、指導助言を受ける

(5) 管理機関における取組について

①管理機関 (コンソーシアム含む) における主体的な取組について

管理機関の意思決定機関である学内理事会を毎月 1 回行い、推進校における活動状況

の報告、それに対する指導助言を行っている。また、管理機関を含むコンソーシアムメンバーが、探究活動や授業の視察を行い、その都度指導助言を行っている。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・ 研究校による取り組みが、継続的に実施できるよう、教員及び生徒の海外派遣費や講演会謝礼などについて、管理機関における予算計上を行っている。
- ・ 本事業に対する教員の事務作業軽減のため、グローバル担当事務職員として地域協働学習実施支援員を1名採用している。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・ 2019年12月18日、スウェーデン・リンショーピン大学と「学術に関する協定書」に調印。同大学からのインターンシップ生の受け入れに関する覚書を作成。
- ・ 2020年1月14日、インドネシア・スマトラ島のディニアプトリ女子校との「学術交流に関する協定書」の更新。
- ・ コンソーシアムメンバーである学校法人立命館との「学術に関する協定書」の更新を2020年3月に行う予定。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「シナジータイム」成果発表			1回					1回		1回	1回	1回
「S.D.」成果発表							1回				1回	1回
「県立大学共同プログラム」成果発表							1回	1回	1回	1回		
「家庭基礎」弁当商品開発		1回						2回		1回	1回	
海外の学校との学校交流							1回				1回	
輝く女性の講演会で内的動機付けを向上			1回				1回				1回	

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

研究開発実施計画に記載した通り、推進校は、学校設定科目「シナジータイム」（特設コースⅠ類）、「Science&Discovery」（立命館コース）の実践と、特設コースⅡ類を中心に、教科での探究的な学びの実践を通じて、生徒が「知識・技能を獲得」するにとどまらず、自ら課題を発見し、他者と協働しながら主体的に取り組む姿勢を身につけることに重点を置いた。

(i) 「シナジータイム」（特設コースⅠ類）

「シナジータイム」は、推進校の学校設定科目であり、今年度は高校1年特設コースⅠ類で実施した。課題発見・課題解決に向かう取り組みを通じて、課題解決能力を育むことに重点をおいている。また、さまざまな教科での学びに応用されるよう、「生徒が獲

得すべき10のスキル」と題し、学びの方法を習得する役割も担っている。高校1年は、「企画・実行力」につながる、「コミュニケーション」「協働学習」「批判的思考」の育成に重点をおいて、授業を実践した。

*〔「生徒が獲得すべき10のスキル」〕

コミュニケーション・協働学習・組織する力・情動のコントロール
 振り返る・情報リテラシー・メディアリテラシー・批判的思考・
 創造的思考・思考転移

以下に今年度の取り組みの概要を記載する。

時期	取り組み内容
1 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・9時間、実施した。 ・「シナジータイム」とは何かを知る。 ・自分が他者にどのように見られているかを客観的に見つめ考える。人との関係作りを考えて、クラスの雰囲気作りについてもディスカッションをする。 ・「シナジータイム」で取り組んだ内容を生かし、生徒自らがオープンスクールのシナジータイム体験会を企画、運営する。
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・10時間実施した。 ・NGO 相談員の講演をきっかけに、社会貢献とは何かを考える。 ・夏期課題「タイについて調べる」のレポートをもとに、タイの社会問題について考え、グローバルな視点を養う。探究活動の成果を、「SDGs みらい甲子園」に応募する。 ・タイの社会問題の探究活動から、「持続可能」とはどういうことかについて考える。
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・7時間実施した。 ・自分たちの思いを形にするにはどうしたらよいかを考える。 ・「SDGs」について、カードゲームを通して再度学ぶ。 ・1年の学びを振り返る。自分自身の変化を実感する。来年度に向けての目標を立てる。

2学期に実施した「タイの社会問題について考える」は、前年度、「タイ課題解決型ツアー」に参加した現2年生から引き継いだ課題を探究していく形で進めた。この探究活動をもとに、今年度も3月26日～31日の予定で「タイ課題解決型ツアー」を企画し、実体験する機会を設けようとしたが、新型コロナウイルス感染防止のため中止した。

毎時間の学習の成果は、ルーブリックを用いて、自己評価と相互評価をすることで可視化した。ルーブリックの内容は固定化させず、授業毎の目標に沿った内容で構成した。また、探究活動の成果を共有する目的で、外部のコンテストに応募した。「サステナブル・ブランド国際会議2020横浜」「SDGs Quest みらい甲子園」への応募が、今年度の実績である。

(ii) 「Science&Discovery」 (立命館コース)

「Science&Discovery」(以下「S.D.」と呼ぶ)は、立命館コース開設時から取り組んでいる推進校の学校設定科目である。高校2年生を対象に、週1回、3時間連続で実施している。生活に根ざした身近な疑問をもつことを出発点に、生徒自身が研究テーマを設定する。自ら設定したテーマに対して、協働して実験・調査・検証・提案等を経験する中で、研究に限らず学校生活や社会生活において問題を見出し、解決する力を養うこと

を目的としている。

学習評価は、学期に1回、100点法で評価する。研究成果のみを評価するのではなく、研究への取り組み姿勢を重視している。具体的には、授業実施ごとに回収する「SDノート」の記録、学期の終わりに実施した自己評価シート、中間発表、最終発表の内容をもとに評価した。

今年度は、授業開始にあたり、立命館大学理工学部教授の講義を受け、研究テーマの決定、研究方法など一年間の研究計画を立てた。研究テーマをもとに、「システムサイエンス」(SS)、「マテリアルサイエンス」(MS)、「ライフサイエンス」(LS)、「インフォメーションサイエンス」(IS)の4コースに分かれ、予備実験、本実験を実施した。2学期からは、コースごとに立命館大学の大学院生が指導助言者として授業に参加し、実験・考察を深めた。その途中経過を、10月下旬に、立命館大学で「中間発表」の形で発表し、立命館大学の教員や学生から指導助言を受けた。3学期は、研究の結論から課題を解決する提案を模索し、その結果を「最終発表会」で発表した。「最終発表会」の一部は英語での発表とし、立命館大学理系4学部の教員にも参加願ひ、採点と講評をいただいた。テーマ設定の面白さを評価していただいたチームが多いが、実験結果の再現性という課題も残った。

また、「つくばサイエンスエッジ」に代表の1班が参加し、他校との交流を通じて、研究への刺激を得る機会としたかったが、新型コロナウイルス感染防止のため、「つくばサイエンスエッジ」が中止となり実践できていない。今年度の研究テーマの一部を以下に記載する。

分野	研究タイトル
SS	渋滞緩和に緩やかな原則は有効か
MS	玉蜀黍の芯から綺麗な水が!?
LS	豆腐プラスチックの分解効率が最も良い条件について *つくばサイエンスエッジ代表チーム
IS	口の空洞と英語の発音との関係性
IS	キャラクターの色による印象の変化分析

研究テーマの決定に際して、生徒の問題意識を重視したため、年度当初に想定していた「地域ないし世界に関連づけた課題研究」につながるテーマを設定したグループは、調査等が研究の中心になる「インフォメーションサイエンス (IS)」コースに属する生徒に偏る結果となった。「地域ないし世界に関連づけた課題研究」を推進していく観点から、研究テーマ設定の段階で指導者側の工夫が足りなかったことは今年度の反省である。次年度は、「S.D.基礎」で「SDGs」を題材に探究活動の基礎を学んだ生徒たちが「S.D.」の探究活動を進めていくので、「SDGs」の学習での気づきを取り入れたテーマ設定を考えさせたい。

最後に、今年度の「S.D.基礎」の取り組みを記しておく。

「S.D.基礎」は、「S.D.」を深化させるため、2018年度入学生から、高校1年生において実施している学校設定科目である。今年度は、2年次の「S.D.」に対する姿勢や意欲を培うことを目的に、『課題研究メソッド』(啓林館)を使用して、研究の流れや統計処理の手法等を身につけさせた。探究活動の手法を学習した後、実際に、「SDGs」の17の目標から「地域の問題」を設定し、アイデアを提案・発表することを学習の最終目標として取り組んだ。

(iii) 特設コースⅡ類における、教科での探究的な学びの実践、ならびに「奈良県立大学

との共同プログラム」

今年度、高校1年特設コースⅡ類で実践した実践例を以下に記す。

科目	単元名	単元目標
国語総合	和歌を読み味わう	コミュニケーションとしての和歌を考える。
物理基礎	静止摩擦力	データを正確に処理する。
保健体育	器械運動 マット	自分の体を思い通りに動かす。

高校1年特設コースⅡ類で、「奈良県が抱える課題を調査（観察）をして、課題を解決するための方策を考え、提案する」ことをねらいに、「奈良公園周辺」の環境について、グループで考察、プレゼンテーションを行った。県立大学の松岡准教授をアドバイザーに迎え、講義を4回（中間発表等を含む）受講、奈良公園周辺のフィールドワークを2回実施、発表準備、考察・提案等は、生徒たちが自主的に放課後の時間を使って行った。成果の発表は、推進校が実施した「グローバル成果発表会」で、ポスターセッションの形で行った。また、代表1グループが「2019年度全国高校生フォーラム」と、生徒交流会（テーマ別分科会）で成果を発表した際、他校の生徒との交流から意見、アドバイスを得て、自分たちの探究活動を客観的にふりかえる機会になった。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

推進校が、今年度、地域と協働して取り組んだ学びとして、高校1年特設コースⅡ類における「県立大学との共同プログラム」と、村井食品との「お弁当」共同開発の土台となる高校1年生で実施している「お弁当総選挙」が挙げられる。以下に、これらのプログラムの、推進校の教育課程における位置づけを記す。

(i) 「奈良県立大学との共同プログラム」

週1時間のホームルームの時間に実施したクラス活動である。実際の活動は、ホームルーム以外に、夏期講習中に「集中講義」の形でアドバイザーである県立大学の松岡准教授の講義を設けるなど柔軟に取り組んだ。

(ii) 「お弁当総選挙」

高校1年生の「家庭基礎」の取り組みである。単元「食事と健康の関わり」の学習で得た知識を、献立計画・弁当製作で実際に生かす。弁当製作が「食べる人のため」だけでなく、弁当を作ることや、弁当の販売が社会の中でどのように人のためになるかを「お弁当総選挙」を通じて考えさせる授業である。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

高校1年特設コースⅡ類における「県立大学との共同プログラム」と「コミュニケーション英語Ⅰ」の連携が挙げられる。「県立大学との共同プログラム」で、実地調査先として選んだ「奈良公園」は、海外からの観光客も多い。海外からの観光客もアンケート調査の対象とし、英語でアンケート及びインタビューを実施した。

「コミュニケーション英語Ⅰ」で、「伝わる英語で表現する」をテーマに、アンケート調査依頼の場面を設定し、生徒相互で英語で練習し、実地調査のシュミレーションを行った。また、「プログラムの成果を英語で発表する」単元を設定し、英語で表現することで、プレゼンテーションには何が必要かを考えさせた。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

a. 地域の特性を踏まえた、グローバルな社会課題の解決に向けた学びを予定しているか。グローバルな視座から、地域の社会課題の解決に向けた学びを予定しているか。

次の3点の取り組みが挙げられる。①県立大学との共同プログラム ②Science & Discovery ③シナジータイム(タイ課題解決型ツアー)特に、③について今年度の概要を以下に記す。(→新型コロナウイルス感染拡大のため中止)

[日程]2020年3月26日(木)～3月31日(火) 場所:タイ、バンコク

[参加者]高校1年特設コースI類の生徒 12名

[研修内容]

シナジータイムで学習してきた「社会貢献」について、現地の企業視察、「カンチャナブリ生き直しの学校」での研修を通じて、学びを深める。また、前年度の研修に参加した生徒たちから引き継いだ課題についても、現地研修を通じて考える機会とする。

【引き継いだ課題】の例

- 1 1%のタイ人がタイの富の7～8割を所有しているといわれている。どうすれば平等性を高められるだろうか。どうすれば、市民の向上心が上がるのか。
- 2 現地寺院が、お年寄りや貧しい人に200パーツを分配していることの是非。
- 3 都市と農村の格差をどのようにして解消していくのか。

b. 外国語に教育に関する取り組みが計画されている場合、地域課題研究との関連性が明確な、コミュニケーション能力を重視した外国語の先進的な取組が計画されているか。今年度実績なし。2020年度4月より「English Plus Department」の設立を策定済み

c. グループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、プロジェクト型学習の手法が、外国語教育と組み合わせられ、生徒の主体的な学びを促すものとして効果的に計画されているか。

次の2点の取り組みが挙げられる。

①奈良県立大学との共同プログラム

上述(③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について)の通りである。

②S. D. 最終発表会での英語プレゼンテーション

高校2年立命館コースの「S. D.」の最終発表会を2月21日(金)に実施する。英語での発表を希望するチームを募り、全25チーム中、4チームが英語でプレゼンテーションを行った。

d. 海外の学校との定常的な連携による海外研修がカリキュラムに位置づけられ、効果的に計画されているか。

高校2年生で実施している「シンガポール・マレーシア英語研修旅行」における、マレーシアの「SEK. MEN. KEB. SULTANAH ENGKU TUN AMINAH (SETA)」(以下「セタ高校」と呼ぶ)との学校交流と、生徒たちが事前に訪問先のシンガポールに関するテーマをグループで設定し、半日のシンガポール自由行動を活用し現地学習を行う「B&S」が挙げられる。「B&S」活動には、シンガポール大学の学生が1グループにつき1人、事前に生徒が提出した計画書をもとに、ナビゲーターとしてついてくれた。

今年度の学校交流、「B&S」とともに、生徒たちの自主的な活動を目的として実践したが、テーマが「文化」に偏る結果となった。「S. D.」の研究テーマと関連させて、「B&S」のテーマを考えさせるなど、本事業の研究開発内容と連携させて取り組んでいく必要がある。

次年度は、シナジータイムでの探究活動(特設コースI類)、「S. D.」の研究活動(立命館コース)、奈良女子大学との共同プログラム(特設コースII類)での内容と関

連させて、上記2つの活動テーマを設定していく予定である。

- e. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトなど、海外からの留学生や地域の外国人生徒と一緒に探究活動する取組がカリキュラムに位置づけられ、留学生等を活用した計画となっているか。

次の2点の取組みが挙げられる。

①シンガポール・マレーシア英語研修旅行におけるセタ高校との学校交流準備

今年度、推進校に派遣されたマレーシアからの留学生が、セタ高校との学校交流準備で、簡単なあいさつ、マナー、コミュニケーションの取り方を生徒たちに教えるなど、自国の文化を紹介した。生徒たちは、自分達の調査結果に加え、留学生の視点を反映させた学校交流の内容を考え、初めての交流会を成功に導いた。

②「2019年度全国高校生フォーラム」への参加

2019年12月22日に実施された「全国高校生フォーラム」に参加し、生徒交流会（テーマ別分科会）で、推進校の生徒とともに活動した内容等を発表した。

③ディニアプトリ女子高校との交流

2020年2月に、協定を結んでいるディニアプトリ女子高校生徒を本校に受け入れ、2日間の交流を行った。2日間の間に双方の文化体験に基づく探究活動（を実施し、その成果をクロージングセレモニーで披露した。

- f. 地域への理解を深めるための効果的な取組が計画されているか。

次の2点の取組みが挙げられる。

①「お弁当総選挙」を経ての弁当商品開発

高校1年生の「家庭基礎」で実施している「お弁当選挙」（インターネット投票）で決定した上位4チームが、村井食品の協力を得て、商品化に向けて考案した弁当を考え直した。この過程で、授業の中では想像できなかったコスト面や調理工程、食品衛生の観点について、プロから指摘を得て、生徒たちは、消費者の視点だけでなく、生産者の視点で捉えることを学んだ。商品化した弁当は、来年度4月から推進校の食堂で販売予定である。また、例年通り弁当の売り上げの一部を、奈良市社会福祉協議会と特定非営利活動法人「ミャンマークリニックと菜園の会」へ募金する予定である。

②ボランティア実行委員会の活動

「できる人が、できるときに、できることを」の考え方に立ち、生徒会役員管轄のもと、有志生徒を募り活動している。今年度は、中学1年生から高校2年生まで17名が活動している。社会福祉法人「奈良市社会福祉協議会」の方に活動企画に対してアドバイスをいただいた。今年度の活動は、軽費老人ホーム「佐保苑」訪問（12/20）と学校近辺の清掃活動（2/8）を実施した。募金活動は、解決したい社会課題や寄付先の団体の信頼性などを調査した上で寄付先を決定する。

⑤成果の普及方法・実績について

取組み内容	成果の普及・実績
奈良県立大学との共同プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・「2019年度高校生フォーラム」に参加(12/22) ・推進校主催2019年度グローバル成果発表会で発表(1/30)
シナジータイム	<p>【高校1年】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推進校オープンスクール企画・運営（体験授業を創る）(6/8) ・「サステナブル・ブランド国際会議2020横浜」に参加予定(2/20) ・「タイ課題解決ツアー」を実施予定（3/26～3/30）

	<ul style="list-style-type: none"> ・「SDGS Quest みらい甲子園」に応募 【高校2年（昨年度実践学年）】 ・「全国高校生SRサミット」に参加（7/30～8/1） ・奈良育英高校の国際理解Gコース実践発表会で成果発表（11/20） ・「マイプロジェクトアワード関西サミット」に出場予定（2/29）
Science & Discovery	<ul style="list-style-type: none"> ・「中間発表会」での発表（ポスターセッション）立命館大学BKC キャンパスにて ・「最終発表会」での発表（学園前ホールにて） ・「つくばサイエンスエッジ2020」に参加予定（3/20～3/21） → 新型コロナウイルス感染防止のため中止
お弁当総選挙	インターネット投票で選ばれた代表4チームの弁当を村井食品の協力を得て、商品化する。商品化された弁当は、推進校の食堂で販売予定。（2020年4月から販売開始を目指している。）

(3) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

2019年入学生からの教育課程を一部変更した。詳細は以下の通りである。

- ・特設コースI類「シナジータイム」を3年間通して実施するよう変更した。
ねらいは、生徒が「知識・技能の獲得」「内的動機づけ」「実践」の各過程をスパイラル式に経験し、その過程を客観化し、実感をもって「他者を巻き込みながら行動する」方法を獲得するためである。
- ・立命館コース「S.D.」を、高校2年3単位から、高校2年2単位・高校3年1単位の分割履修へと変更した。探究成果の深化を目的に、成果発表の形式を従来のプレゼンテーションに論文作成を加えたことによる。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

推進校の「グローバル推進委員会」が、研究開発内容を推進していくための方策の1つとして、「探究的な学びを実践する集団を目指す」ことをテーマに、計5回の教員研修を実施した。以下に概要を記す。

実施日	研修内容
6/11	「アクティブラーニング型授業への転換と生徒の学び・成長」 学校法人桐蔭学園理事長 溝上慎一氏による授業視察と講演
10/31	「研究開発内容を授業でどう実践するか」推進校教務部による校内研修
11/27	「国際バカロレア教育の学びのサイクル」推進校IB委員会による校内研修
12/27	「学際的単元について学ぶ」推進校IB委員会による校内研修
2/26	「メタ認知について」

	岡山大学学生総合支援センター 准教授 中山芳一氏による講演(予定)
--	-----------------------------------

③学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

推進校のグローバル推進委員会の下部組織である探究教育委員会が、週に一度の会議で、今年度の研究開発内容の具体的計画・進捗状況の確認等を行い、研究開発の進捗管理を行った。また、探究教育委員会の委員を中心に、研究開発内容の3要素である「知識・技能の獲得」「内的動機づけ」「実践」を測るルーブリックを考え、各々の取り組みを生徒・教員ともに客観化できる仕組みを作成した。推進校中学校が実践している国際バカロレア教育の「ATLスキル」を参考にしている。詳細は、以下に記す。

【ATL (Approaches To Learning) スキル^{*1}とは】

以下のATL一覧表(表1参照)の10のスキルのことである。生徒には以下の3点意識させている。

ATL スキルのカテゴリー	ATL スキルクラスター
コミュニケーション	コミュニケーション
社会的 自己管理	協働
	組織
	情動 振り返り
リサーチ	情報リテラシー
	メディアリテラシー
思考	批判的思考 (クリティカルシンキング)
	創造的思考
	転移

表1 ATL 一覧表

《ATL スキル発達段階》
<p>観察者／導入（観察） あるスキルについて知り、他者がそのスキルを実践しているのを見ることができる。</p> <p>学習者／発展（模倣） そのスキルを用いる他者を模倣し、足場づくり（スキップフォールディング）とガイダンスのもと、そのスキルを用いる。</p> <p>実践者／使用（実演） そのスキルを自信をもって効果的に用いる。</p> <p>熟達者／共有（自己制御） 生徒は、そのスキルの使い方を他者に示すことができ、また、スキルがどの程度効果的に用いられているかを正確に評価することができる。</p>

		1. コミュニケーション	2. 協働性	3. 整理整頓する力	4. 情動スキル	5. 振り返り	6. 情報リテラシースキル	7. メディアリテラシースキル	8. クリティカルシンキングスキル	9. 創造的思考スキル	10. 転移スキル
観察者	1to2										
学習者	3to4										
実践者	5to6										
熟達者	7to8										

表2 ルーブリック一覧表

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

コンソーシアム	取り組み内容
学校法人 奈良育英学園	「シナジータイム」の成果発表と生徒間交流の機会提供 (奈良育英高校国際理解Gコースの実践発表会)
特定非営利活動法人 関西NGO協議会	「国際協力とは何か」をテーマにした講演会と生徒向けワークショップ (「シナジータイム」で実施) (下部組織である「PHD 協会」から2人来校)
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	ボランティア実行委員会へのアドバイス
公立大学法人 奈良県立大学	高校1年特設コースⅡ類の共同プログラムにおける指導助言
有限会社 村井食品	「お弁当総選挙」を経ての共同商品開発
学校法人立命館 立命館大学	<ul style="list-style-type: none"> ・高校2年立命館コース「S.D.」へのアドバイス ・「『S.D.』の発展」をテーマにした教員向け講演 ・本事業の課題発見・改善につなげる「アンケート」作成および分析へのアドバイス

8 目標の進捗状況, 成果, 評価

研究開発の目標に沿って、進捗状況・成果・評価を以下のとおり報告する。

① シナジータイムを今年度も継続実施した高校1年特設コースⅠ類では、タイ課題解決ツアーを見据えた体系的な指導内容を確認することができた。また、2020年度に向け、全ての学年およびコースにおける「シナジータイム」(1単位)の設置を決定した。また、立命館コースにおける「S.D.」についても研究の成果を論文化するために、2021年度以降は高校3年生でも1単位を設置することを決定している。また、文系理系の枠にとらわれない研究を目標に、探究活動に積極的に取り組んでおられる立命館高校の見学および指導教員との懇談に、推進校から2度、のべ8人を派遣するなど、教員の指導力向上に資する取り組みを頻繁に実施できた。

- ② 複数の教科で先行的に、概念をベースにおいた教育活動に取り組むことができた。「校内研究授業の実施回数」は目標シートに掲げた回数に達する見込みである。これらの授業開発の成果としてグローバル、またローカルな視点がそれぞれ培われていることがあげられる。グローバルな視点としてはCEFR：A2以上の生徒が9割2分、B1以上の生徒が2割2分となっている。「教科の基礎学力」としての目標値にも近づくことができた。また、ローカルな視点としてはアンケートによる「将来地域に貢献したいと希望する生徒の割合」は7割9分となり、目標値を達成できた。探究的な学びにより、生徒の意識が学習面また行動面ともに変容したと考える。
- ③ 地域や世界とつながる行動実践を授業内外で促すことで、生徒の活動の幅が大きく広がっている。目標シートにおいて「地域人材を育成する高校としての活動指標」として掲げた、「社会課題、ビジネス課題等に関する国内外の大会への参加者数」はクエストカップやマイプロジェクト、サステナブル・ブランド会議などの参加により目標を達成できる見込みである。積極的に地域や世界の課題に取り組む姿勢が見られる。
- ④ 生徒に自らの力のメタ認知を促すために、国際バカロレアのATLの手法に学び、ルーブリックの開発を行っている。現在試案をつくり、探究系科目の評価において試験的に運用することができた。「シナジータイム」および「S.D.基礎」では学期に1回のふりかえりとして活用することができた。

9 次年度以降の課題及び改善点

今年度の取り組みを踏まえ、以下3点を課題としてとらえ、来年度、改善に向けて取り組む。

- ①教科単独の取り組みにとどまらず、教科横断的な学習を取り入れて探究学習を実践する。具体的には、グローバル推進チームが計画を立て、教科主任会と連携して取り組む。
- ②ヒアリング力・スピーキング力の強化を目指す英語教育を実践する。
グローバルな視点で地域課題を考える探究活動を現段階よりも発展させていくために、英語力の強化は必須である。従来、日本人教師とネイティブスピーカーで行っていた授業を、ネイティブスピーカー2人のティームティーチングに変更し、スピーキングに特化した授業を実践していくことで改善を図る。
- ③学校設定科目を中心に、今年度、探究活動の成果として挙げた「提案」を「行動」に移す。
コンソーシアムとの連携を今年度以上に強化して、成果発表や行動の場を広げていく。
来年度、上記の①～③を実施し、活動状況や得た成果（課題も含む）を他地域のグローバル校にも発信するとともに、他校の情報を得ながら、取り組みを深化させ、新たなネットワーク作りに取り組んでいく。

【担当者】

担当課	育英西中学校・高等学校	T E L	0742-47-0688
氏 名	森岡 智史	F A X	0742-47-2689
職 名	教諭	e-mail	t-morioka@ikuei.ed.jp